

## 巻頭言

# 「子ども役割」と「大人役割」の間<sup>あいだ</sup>

## — 保育体験学習 —

武藤 安子

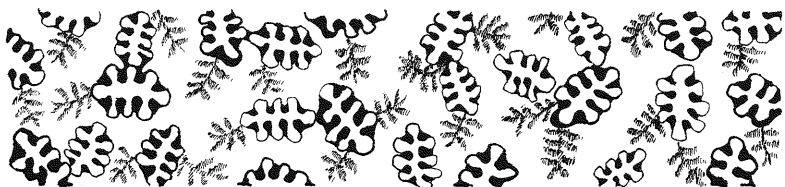
学校教育の過程で、児童・生徒が乳幼児と触れ合う保育体験実習を意図的、積極的に取り入れていこうとしている動きにはいくつかの背景がある。教育政策としては、平成十二年度中央教育審議会による「少子化と教育について」において、保育体験という目標がはっきりうちだされた。少子化への対応およびその解消について、政策面はもとより社会全体の取り組みを強調し、学校教育の役割についてかなり具体的に提言している。現在では、小・中・高等学校のさまざまな教科・カリキュラムに体験学習やボランティア活動を行う機会が積極的に設けられるようになり、保育園・幼稚



園などのほか社会福祉施設や養護学校などを訪れ交流する子どもたちの姿が多く見られるようになった。ただ実際には、体験学習はほんの一日の見学であったり、子どもへの関心が評価の対象にされるなど、その方法やあり方については学校の教師も苦慮しているところである。

保育体験を少子化の解消や、親になるための準備としてのみ矮小化してとらえるのではなく、育ち合う人間の営みに目を向けることの効果について、教師や保育研究者からの研究報告も増えてきた。生徒たちにとって乳幼児はまさに自分たちのことばの届かない異質の存在であり、彼らが「異質」なものとの出会い、そこに生じる違和感、軋轢、ギャップを回避せず、その葛藤の解決を求めつつ、自らを変え、他者を受け入れ、ともに生きる力をつけていくことに保育体験学習のねらいがあるとされている。

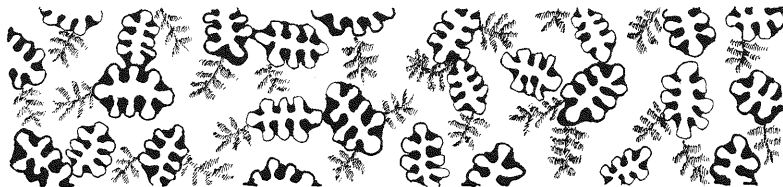
私は現在、大学の小学校教員養成課程で教えているのだが、大半の学生は、三年次の小学校の教育実習まで、街で見掛ける以上には、乳幼児はもちろん小学生とも身近に接したことがほとんどないというのが事実である。このような状況で教員になり、児童・生徒に向かい合い、高校生には男女共修となった家庭科の「保育」も教えることになるわけで、この数年の間に大学の課程内で多少のカリキュラム改革はなされてきているが、あまりにも実践的に学ぶ機会が少ないのに危惧を抱いていた。私自身は大学時代、附属幼稚園で行動観察をする授業もあり、別の付設の臨床施設で個別やゲ



ループの臨床活動に継続して参加する機会もあって、人に関与する学問の理論と実践は車の両輪のように相即して学ぶことが必須だと考えていたので、私の授業では、この十数年来、できる限り子どもと触れ合いながら学ぶ方策を講じてきた。

授業に複数の乳幼児とその親たちに来てもらって一緒に遊んだり、親たちに本音で話してもらって時間を設けることもしているが、別に、近隣の幼稚園の協力を得て、授業時間外に継続して幼児の参加観察実習をすることを必須としている選択の授業がある。それぞれが採取した観察事例を発表、討論を重ね、最後に文献考察を加え研究レポートの提出を義務としている。もちろん、小学校教員免許の取得に就学前での観察実習は必要とされていない。しかし、近年、特に低学年の学級経営では、子どもたちの多様な個別ニーズを受けとめながら集団としての体験をどのように育んでいったらよいかということに教員は苦慮している。就学前教育との連携も求められている折から、この授業を受講している現職教員たちは、「宇宙人のようにだと惑わされていた一年生の実態がよく理解できた」と新鮮な驚きを露わにしている。

学生たちの採取してくる事例で実に多いのが、大人の関心を引きたがり、先生に認めてもらいたがり、しかしそれに失敗する幼児の姿である。彼らはそれに報われなかった自分の過去の子ども体験を重ねて同一化し、「子ども役割」や「生徒役割」に耽溺する傾向がある。親や先生や大人になる前に一度吐き出したいたい思いと子どもへの



共感性。私は、それを受けとめるのもマンパワー養成大学の授業に必要なカウンセリング・マインドと心得て討論を聞いている。しかし次第にその視点は、未来の自分の立つであろう教師の姿へと移っていく。そのようにして相互の役割交換を繰り返しつつ、親や教師の役割がとれるようになっていくのではないだろうか。次に挙げる事例などは―私は書きながら笑ってしまうのだが―、仲間や先生に寄せる気持ちと社会のルールのどちらも大事にすることの難しさや、集団では常に断片しか見ていない教師のかかわり方について議論が白熱した。

「一人の女兒が屋根の端から流れ落ちる雨水に手をかざしていた。するともう一人がハンカチを取り出しビショビショにぬらした。すると他の一人が片腕をさしだしぬらした。全て無言であったが、三人は突然頭から水をかぶり始め大声で笑い出した。そこへ通りかかった先生が「何をしているの!」と大声で叱った」

「何人かの子どもが砂場でおだんごを作っていた。ある男児が園庭の白砂をスコップですくい先生に見せに行くと先生は「きれいねえ」とほめた。すると、その直後に砂場の子どもたちはスコップを持って園庭を駆けずり回って白砂を集め出した。しかし大変な砂埃を見て先生は、「お庭の砂は採らないの!」と叫んだ」

(横浜国立大学)

